

## 佳作

## テーマ3…多様性を認め合う社会をめざして 「私を知ることから始まる多様性」

東京都・国際基督教大学高等学校2年 河野 未弥

「日本人はもつと多様性を受け入れるべきだ」という意見はいろいろなところで見聞きする。しかし、私はそのような主張を目にしたリ、耳にしたリする度に、少し違和感を覚える。私の周りにはいろいろな人がいて、多様性のある社会だと感じているからだ。

私はミャンマーで生まれ育った。昨年に日本の高校に入学した。母は日本人、父がミャンマー人。ミャンマーは135の民族の住む多民族国家で、身近にビルマ族だけではなく、シャン族、カチン族などたくさん異なる文化や言葉を持つ人がいた。父が旅行の仕事をしていたので、外国の人々と会う機会も多かった。いわゆる多様性のある環境だった。そんなところから来た私だが、日本もいろいろな人がいて多様性に富んでいると感じている。

私は日本社会は多様性がないのではなく、人々がお互いをうまく認め合えていないのではないかと考える。そして、多様性を認識・容認できないのは、自分自身をあまりよく知らず、そして自分らしくあることを認められない人が多いからだと思う。自分自身を知らない、他の人の自分と違う点や似ているところなどがよく理解できないのではないかと、そう思ったことを理解できないと、他の人々の持つ多様性を感じ取り、受け入れることもできないと思う。

私は自分の経験からそれを学んだ。小学1年生から小学6年生の1学期までヤンゴン日本人学校に通っていた時の経験だ。当時、私は大部分の同級生と違う環境にいた。物事に関する考え方も多くの面で同級生と違って、自分对他の子全員という感じの思いになってしまっていた。父親がミャンマー人であることなど、自分のことを他の人あまり知られたくなかったし、他の人に批判的だったり、うまく受け入れ

ることができなかった。たくさん悩み、いつも楽しくなかったのを覚えている。今思うと、同級生はそれぞれに違う個性を持った子たちだった。これから話す機会があればきつと楽しく話ができるだろう。今の自分は、自分のこと(日本人とミャンマー人のハーフであること)もオープンに人に話すことができる。他の人に対しても思い込みのレッテルを貼らずに興味を持ち、その人の個性をそのまま受け入れることができるようになった。

なぜこのように、感じ方や考え方が変わったのか？ それは「私」のことをきちんと知り、認めることができたからだと思う。悩みが多い時期の私に、母はいつも質問をした。「あなたはどうなると幸せ？」「何がしたい？」「なぜそう考えるの？」などと。本もたくさん読んだ。私のことを理解してくれる先生や友人にも出会った。自分のことがだんだんと分かって、自分自身が好きと思えてきた時、他の人の個性もより理解できるようになり、そして各々の個性は尊重されるべきという考えが強くなった。

日本の学校では、自分について考える時間や機会が少ない。既に決められている多くのルールに従い、先生の指導のもと、皆と一緒に活動する時間がほとんどだ。異なる個性や発言は歓迎されないことが多い。小さいころから自分の個性について感じたり、考えたりする機会がもつと与えられ、それを自由に表現することができれば、自分のことを早い時期に知ることができのではないかと思う。そして自分自身の個性を認めることができれば、私のように、他の人の個性も尊重したいと思うようになるだろう。私は自分自身を知って好きになることが、多様性を認め合う社会になる最初の一步で、一番大切だと思う。

医師になったら、体の多様性というのにも勉強し、患者さんたちにそれぞれの体の個性を話してあげたい。また、自分の体の個性を知ることとても楽しみにしている。